

大阪の教育

大阪教師会

〒596-0814
大阪府岸和田市岡山町
443-13
電話 090 (7363) 9544
振替口座 00910-9-1433

豊かな学びが未来を拓く

学びの可能性に向けた授業及び教科書のあり方

大阪教師会 中曽邦輔

令和2年度より学校教育は「新学習指導要領」に沿って、何よりも主体的・対話的で深い学びの実現に向け、授業実践が期待されている。また、それを支える教科書、その多くは「主たる教材の展開」の果たす役割は大きいものがあり、展開の結果を反省し、それを活かしてさらに授業を改善、改良して行くことが必要である。

今回の学習指導要領の改訂は、資質・能力や学ぶことのプロセスを示している。その根本にある考えは、教育課程を通して子供の学力の土台をなす資質・能力を育成しようとするところにある。それは3つの柱からなる①「知識・技能」②「思考力・

判断力・表現力等」③「学びに向かう力・人間性など」と整理されている。それらは問題解決を行う力の基礎にあたる力であり、同時に学びに向かう可能性、即ち、子供の学習中の活動を示している。

その一つ目の柱である、「知識・技能」は、事物・事象に出会ったとき、既習の知識・技能を使いながら、独自の感性で特徴を把握し、操作、活動ができるようになっていくことである。「何を知っているか」にとどまらず、「何ができるようになるか」にまで発展させることを求めている。このような改訂を受け、学習者である子供、それを支援する教師はこれまでの教科書中心の学び方や教え方から学習観・指導観を大きく変えな

ければならない。

旧学習指導要領においても、問題解決的な学習を述べてきたが、現場ではそれへの理解が浸透せず、相変わらずの教科書中心の授業、教師は子供に結果を教え、それで知識として与えた、記憶（原理注入主義）させ満足している。その後、ブレテストを実施、次に本番のテストで記憶の再生産、といったプロセスの授業である。

具体的な授業風景を覗いてみると、教師は「時間が無い」と言って、国語、算数、理科、社会科、道徳においてプリント学習が主流になってきている実態がある。そのプリントの内容は、俗にいう穴埋め学習である。その結果、学年によって違いはあるが、私語、手悪さ、寝る、本読み、教室から出ていくなどの現象が起きる。そのような現象を見た教師は、そのような現象に地域が悪い、親の躾が悪い、学力が低い、愛着障害などの理由を並べる。

このような実態の中で果たして知識・技能が身につくことは難しいと思われる。

二つ目の柱である、「思考力・判断力・表現力等」を育てるという視点で授業設計を考え、実践すると、子

供は楽しい・面白い・ときどきする・ワクワクするという。ではどのような授業をすればいいのだろうか。それは単元の導入において、子供が疑問・調べてみたいといった事を学習課題に仕立てる。子供達は自分の発表したことが「学習問題になる」事で解決する必然性・必要性を感じ、それへの予想、解決方法を考えることに意欲を示す。すると予想や解決方法について、既習した知識、経験したこと、知っていることを子供同士で意見を出し合い、お互いの意見の違いや、共通項を見出し、観察・実験のやり方を見出し学習が進行する。そのような学習を通して思考力・判断力・表現力を身につけていくことになる。

小学校において、解説型（レクチャー型）の授業をいくらしても、思考力・判断力・表現力を育てることは難しいのではないだろうか。

理科の授業を例にもう少し具体的に述べる。導入時における学習問題設定は初期事象といつてある事象・あるものに触れさせる。或いは、資料を見せる等で、子供の直感で感じた事（不思議に思ったこと・感動したこと・調べてみたいことなど）を自由に表現させ、それを話し合いに

よって、子供で学習問題を決定させる。といっても全て子供任せではない。教師のねらいに沿うように子供と話し合う。そしてそれについての予想をさせる。予想のしやすいように、三段階を設定する。「きつと……である。その理由……と思う。」「たぶん……と思う。理由は……であると思う。」「なんとなく……と思う。」「(理由なし)。このような予想の方法を取り入れると、クラス全員が学習問題に対して参加(存在感)していると感ずるので、楽しい、面白い。○科が好きになった、といった反応が多く聞かれる。

また、研究授業でよく見かける「話し合う」という活動場面を設定しているが、現実には数人の子供の「正解の言葉」を拾って授業を進行させている場面を多く見かける。その反省会で、多くの教師は、「問題解決の学習をしていると教科書が終わらない」「テストに間に合わない」「学力が付かない」などの反応をする。

基本的に、多くの子供は興味・関心がないと行動(学習)のめりこまない)に出ないということを経験に銘じていることから、授業展開を考え実践することである。おや!?、調べてみたいなどがあると、子供は何ら

かの行動に出る。その中で教師のねらいにあるものを拾い出して、課題にしていくと、子供は自分が言ったことが、クラスの問題になってみんなが解決に向けて動いていると感じると、無関心だった子供までも、やる気を出して気付いた事をどんどん発表するようになり、知らず知らずの内に「思考力・判断力・表現力」が身についているといえよう。

最後に三つ目の柱である、「学びに向かう力・人間性など」については、一つ目、二つ目の柱を含めてであるが、特に「学びに向かう力」は、課題に対して、自分の考えや、判断したことをノートに書いたり、友達と話し合ったり、みんなに説明したりする中で養われる。

正解は分からないが調べる方法や自分から発信する、友達の力を借りて調べたり、実験したり、読み取りたりをやってみる。分からないと、知っている友達に聞く、ノートの書き方、理科であれば実験道具をセツトする、実験が終了すると片づけるなどである。これらは一人一人の学習に対する意気込みを物語っている。このような行動は誰が見ても見えるが、目に見えない「学びに向かう力」がある、それは教師にしか見え

ないものである。しんどい子供を含め多くの子供をしつかり見て、前回の授業と今回の授業の姿を比較してズレを発見することである。そこを見逃さず声で褒めるとか、ノートの中で褒めるとかで「学びに向かう力」が大きく違ってくる。

以上の三つの柱を単元構成し実践することで、子供同士のこころの壁がとれ、お互い何を言ってもみんなが受け入れてくれる学級ということ、教育の大きなねらいである「人間性の育成」へと近づけるのではないだろうか。

私たち教師は日常の授業後において、子供一人一人を思う時、特にその子は授業に満足しただろうか、手を上げていたかな、友達と話し合いができていたか、ノートを見たときねらいに達していない等々を感じ、授業改善を行うことが必要である。その時のものさしは学習指導要領である。

理科的な見方・考え方を基礎に資質・能力の育成

小学校では、理科においては問題解決の授業展開を中心に研究、実践することが学習指導要領に沿うものである。従って、次年度から使用

する教科書には、具体的に学習過程を明記している。例えば問題から始まり予想へ、実験(観察)方法から、考察へ進め、さらに、振り返りといった内容である。その授業展開の中で、「理科的な見方・考え方を働かせて資質・能力の育成」をするものとしていっている。ではどのような資質・能力の内容になっているのか考えてみる。と次の通りである。

「見方・考え方を働かせて問題解決し資質・能力の育成」とは、一人一人の子供がどれだけ自力、相互扶助で進めていけるか、それを可能にする力を資質・能力ということができる。もう一歩踏み込んで考えると、次のようなことも含まれるであろう。別の言い方をすれば、問題解決を含めて目標を達成できる力、或いは知的活動を推進する力ということになる。旧学習指導要領を見ると資質・能力についての育成について、次のような内容が記述されている。これは子供、及び教師の授業設計及び授業評価について大きな視点となる内容である。それは、事実をありのままに見る能力、比較観察する能力、数量的に見る能力、問題をつかむ能力、結果を予想する能力、企画する能力、原理(既知)を応用する能力、

事実から推論する能力、筋道の通った考え方をする能力、分析的に判断する能力、総合的に判断する能力、普遍化する能力などが考えられる。

以上の事柄を踏まえつつ単元構成し、授業を行い、リアルタイムに評価することで、子供達は多様な意見を出し合い、授業の改善、改良がなされると深い学びに到達し、考察まで自力で解決するであろう。

その結果として新指導要領のねらいである資質・能力である、「知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力・人間性等」に到達するであろう。

それで子供達は満足した、楽しかった、次の授業が楽しみだというようになる。

理科で求められる教科書の役割

理科の教科書では、子供が見方・考え方を働かせ、資質・能力の育成に向けた問題解決の活動をさせるものとして編纂されている。一方、教師はより主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が求められる。これは子供にとっても、教師にとっても学びのモデルになる内容である。従って、教科書の果たす

役割はこれまで以上に重要であるといえよう。

理科では他教科と異なり、現行の学習指導要領においても、小学校では問題解決の能力、中学校では科学的に探究する能力として、「何ができるようになるか」を求めている。教科書の記載でも、問題解決の過程や科学的に探究する過程を通して、比較・関係づけ・条件整備・推論といった内容を扱っている。

しかし、今回の改訂でこれまでの問題解決の能力として求めていた比較・関係づけといった内容が、各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものとして各教科も目標に示すこととなった。「見方・考え方」の「考え方」として整理され、新たな問題解決の力が別に示された。

また、今回の改訂で示された「見方・考え方」は、現行までの学習指導要領で教科目標に位置づけていた「科学的な見方や考え方」とは異なるものである。「科学的な見方や考え方」は問題解決の活動によって身につける方法や手続きと、その方法や手続きによって得られた結果及び概念を包含するものとされている。一方、今回の改訂で示された「見方・考え方」は、資質・能力を育成する

過程で子供を働かせる「物事を捉える視点や考え方」であり結果及び概念、即ち獲得する知識は含まれていない。このように科学的な見方や考え方と「理科的な見方・考え方」は字面では似ているが、その意味と位置づけは全く違うのである。

したがって、指導者である教師は、これまでの授業をどう変えていくのか考えなければならない。「これまでの授業の何を変えなければならないのか」を明確にし、授業改善に努めなければならない。これまでの問題解決の過程を明確にした構成にとどまらず、見方・考え方を働かせながら、子供が主体的・対話的で深い学びの視点で授業改善が図られるような単元構成が求められる。

主体的・対話的で深い学びになるような授業改善へ

① 主体的な学びの視点による授業改善では、学習のはじめに、子供自身が自然の事物・事象から問題を見出すことからスタートし、見通しを持って観察・実験を行っていくことが求められている。これからの教科書は、例えば、単元の冒頭で、子供にとって興味関心が大きい働き、疑問や不思議、自分もやりたい、確か

めてみたい、調べてみたいなどが起きるような写真や事物・資料を提供することによって、自ら問題を見出すきっかけを創り出すことを求めたい。

② 対話的な学びの視点による授業改善では、問題の設定や検証計画の立案、観察、実験の結果の処理、考察などで、あらかじめ個人で考え、その後意見交換、根拠を基に議論話し合い・対話する。自分の考えをより妥当なものにすることが求められている。したがって、教科書では、多様な考えが出るように構成されている。話し合いによって妥当性もとめられるように、キャラクターを使って盛り上げるようにしている。

③ 深い学びの視点による授業改善では、子供が学習を通じて新に獲得した資質・能力に基づいた「理科の見方・考え方」を、次の学習や日常生活で活用できるようにするか、という視点で授業改善を目指すことが求められている。教科書では、例えば、単元の終末に単元で学習した内容やそれまでに獲得した知識を活用して、さらに考えるきっかけとなっている材料や問いかけを提案することを求めたい。また、子供自身が学びの前後、自身の変容を、知識及び

技能に関する内容だけでなく、問題解決や探究スキルとして「何が出来るようになったのか」を振り返ることが出来るような視点を示すことが大事である。

以上3つの視点で述べたが、これをもっと子供のためにするためには、日頃の授業もさることながら、授業の後の子供のノートを観察し、教師の一言の誉め言葉を書き続けることであろう。その言葉に触発され、学習指導要領のねらいに沿う大きな一歩となるであろう。

まとめ

今の小学生が社会人になる頃には、AIも相当進化しているであろう。学習においても正解を探す学習ではなく、正解にたどり着く迄の考え方や、お互いの見方・考え方と議論をして、方向を決めることが多くなるであろう。

人から与えられた課題を解決するだけでなく、自分で課題や方向性を見出し、それについてまず自分の考えを構築して、それをよりよくするためにいろいろな情報を収集する力が求められるであろう。それは多様な見方・考え方があることを、自分なりにまとめて結果を出し進行でき

るようになることである。

その素地として初等教育では、教科書に書いていることが絶対で、教科書に書かれている熟語を丸暗記させるような授業では、授業嫌い、教科嫌いを作るようなものである。学校を終え社会人になったときに、社会について行かれるような人間になつて欲しいと願っているのである。

先輩教師からよく聞かされた言葉に、「教科教育は、教科書を『教える』のでなく、教科書『で』教えるんだよ」と。

今回の学習指導要領の真髄はそれであろうと思っている。教師に任されている部分が多いので責任を重く感じると共に楽しみのほうが多いのではないだろうか。

教育風鈴

生徒のすこさ

赤司久明

私の教師生活は非常に幸運に恵まれたものである。初任校は鳴尾高校。

新卒一年目の九月、サッカーをしたくてたまらないある生徒が同好会を作った。規則では顧問が二人いるので、京大でアメフトをやっていたという中年の理科のF教師、もう一

人、文芸部の顧問になれず腐っていたサッカーなど知らない私が選ばれた。生徒は経験者は主将一人だけ。練習場所もない、ボールもないという出発点。学校近くの公園で教室くらの広さの空き地を見つけて、皆でお金を出し合って買ったボール一つで始めた。

私がキーパーで生徒は直ぐ近くから私めがけて蹴ってくる。それではいかなる危険性も感じなかった。主将以外、誰も真つ直ぐ蹴れないのだ。ルールも主将以外知らない。

F先生は私に言った。「赤司先生、京大のアメフトでは経験者は誰もいない。」それでもいつも経験者を集めた関西の強豪大学と覇を競った。ボールゲームのコツはどれも一緒です。

1 ボールに近寄る時に最大のスピードになること

2 ボールを持ったら、パスを受けたら、すぐ離す(蹴る)

3 ボールを蹴るフォームなど一切考えない

4 すべてに優先してボールに先に触ること

これは最高の指導方針で、これで奇跡が起こったのである。

さて厚かましくも生徒が、練習試合を企画した。こっちの余りの珍ブ

レーに相手は笑い転げながら30得点。野球で言えば100対0か。次も同じ。三ヶ月経っても依然として二桁負けが続く。そして得点ゼロ。三ヶ月を過ぎた頃、初めて9-1で負け

た。1点でも入って皆大喜び。あほが勘違いして次の練習試合で皆で攻めたら20-0ではる負け。これで初めて皆で何か感じるところがあつて、次の試合は守り重点でやったら、なんと1-1。奇跡の引き分け！スピードを上げたスライディングタックルが守りに非常に効果的と全員に分かった。4ヶ月目に初めて勝った。1-0。通用すると分かったタックルを全員でしまくって失点ゼロ！F先生の方針を部員一人一人が、自分なりに消化して身につけていたのである。F先生も私も、相手チームの選手がどんなに嘲笑しても、蹴るフォームについては一切言わず、蹴られたらそれで宜しいで終わり。生徒の工夫に任せた。ただ、テキストにある、ボールを取ったらドリブルして持つて行くプレーは厳禁した。スピードあるプレーではないからである。

私は、生徒と一緒に練習して、生徒に「先生みたいに運動神経のない人は見たことない」と言われた。ボールを蹴る時に最大スピードになつて

いるように走るのだから、練習は激突につぐ激突。私はどんなに激突しても大丈夫な身体をしていたので、生徒には良い練習台になっただろう。なにか役に立ったのはそれ位だ。ただ平凡な身体能力しか持たない生徒が自分で必死に工夫を重ねて成長していくのを間近に見るのは素晴らしい体験だった。

こうして、「しっかり守れば勝てる」というチーム方針を全員で体得しているこのチームは、2年になると不気味に勝ちだして、2年時の終わりにある新人戦で何と県代表！になり、32校集まる近畿大会で3位！になったのである。

総体は決勝で敗れたが、秋の国体予選では見事優勝し、岐阜国体に出場した。この時は、仙台育英に1-0で負けた。しかし、正月の全国大会に出場！全国32校のなんとベスト8になったのである。

この経験は私に、生徒は無限の可能性を持っていると確信させることになった。部員を鍛えて、転任先を含めて以後5回近畿大会に連れて行けた。国語教師なのに文芸部の顧問に遂に成れなかったが、幸運にも素晴らしく充実した教師生活を経験できたのである。

子供が変わる接し方

「主体的・深い学び」ができる子供に育てるためには、教師は、日頃どのような授業作りや学級作りを心掛けるかというのかについて実践例を交えながら述べることにする。

授業作りとは、教材をもとに、いかに子供を動かすかということである。学級作りで「子供がいうことを聞いてくれない」と悩むのは、子供のこころを知らないことが原因かも知れない。子供が動きたくなくなるように仕掛けをすることが必要であろう。

「子供が自分で考える場」をつくる教師の仕掛け

学級づくりでも授業づくりでも、私はとにかく子供自身が考える場をつくることに心掛けていた。教師は言ったことを忠実に守って、再現するのではなく、子供自身で考えて課題を見つけたら、予想、方法を考えることが重要だと思っている。

とはいえ、すべてを子供たちにまかせれば良いというわけではない。最初の一步は教師から仕掛けることも必要である。

以前、1年生の担任になったとき、

私は、「成長の一コマに」と思い、その子が真ん中に写っている集合写真をプレゼントする」ということをした。生活科や入学記念写真では、自分が真ん中に移ることはない。そこで、4月生まれの子なら満開の桜をバックに、中央にその子がいるようにしてプレゼントした。

そしてもう一つ、私からのプレゼントとして、誕生日の子に花一輪を渡すようにした。写真の真ん中の子が誕生日といっても、パッと見ただけではわかりにくい。そこで、目印として主役に花を持たせて写真を撮ろうと思ったのである。

この企画は一年間つづけた。大変好評であった。子供たちは集合写真とお花を持って家に帰ると、それを見た保護者は大喜びで、「幼稚園でもこんなにしても良かった」といって、何度も感謝の言葉をいただいた。

こうして私が、一輪の花をあげているうちに、クラスの子供たちが、「私たちもお花をあげたい」と言い出した。

でも、勿論私と同じように花屋さんから買うことはできないので、「お金をかけない方法を考えよう」と言うと、子供たちは考えてくれた。そして、折り紙でお花を折って、スト

ローにさして、クラス全員が作って、誕生日の子に渡した。

私の誕生日にもプレゼントしてくれた。

このように、子供はだいたい教師のアイデアのまねをする。

教師が花をあげたら、子供たちもお花をつくる。

教師がメッセージカードを書いたら、子供たちも同じようなことをしようとする。

先生方が提示する「たとえ」の一つの方向性でもある。だからこそ、教師は、子供が自分たちから動くような仕掛けをしていく必要がある。

ただし、お花をプレゼントするにはお金がかかるので、まねしてほしいとは思わない。私がこのような事ができたのは、学校の近くに花屋さんがあり、かつての保護者であり、その方の協力があつたからである。

子供は見ている

「先生『星』の勉強、自分にさせてください」

問題解決的な学習の展開で勉強が続いていると、子供たちは理科が好きになったり、積極的になったりして、教師の理科の授業の準備などに

も協力的になってくる。中には教師に「〇〇は学習しないの?」「ぼく□□を持っているねん」など話をするようになる。子供とそんな話をして

いる時、

「先生、お願いがあるんやけど?」

「なに?」

「ぼく、『星』の勉強の授業したいんです」

「エッ!、できるんか」

「できると思う」

「そうか・・・よっしゃ、

じゃあ、君の計画を書いてきてね」

「うれしい!」

「教科書を見て勉強の順番を考

えてね。それをみて先生とまた考

えよう」となる。

実際やってみると、導入、展開

と上手くやるのでたいしたものだと

感心させられた。

実際の星を観察するということ

なり、夜の星の観察を町別で実施

してくれる。

勿論、夜の学習であるから、私も

参加して2時間ぐらいで終了という

ことになる。なかには、保護者の方

も参加してくれて、和やかな理科の

学習ができた。

子供たちを信じて、教師が少し後

からついて行く、聞ける内容であ

ば聞き入れることで、子供達は主体的になり、会話が弾んだ学習になるであろう。

小学校も高学年ともなると、知識

的なことは教師以上のものを持つて

いる。それをうまく活用することに

よって、学習に活気が出てくる。子

供が子供を教えているので、質問や

対応が活発になり深い学びになると

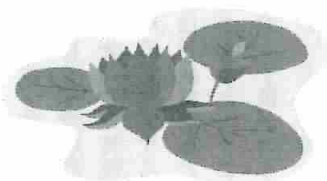
考えている。

子供の教え方を見ていると、言葉、

しゃべり方、動きが自分を見ている

ような気がして、嬉しくもあり、直

さなきやと思うことも沢山あった。



協 賛 校 名 一 覧

天満学園太成学院大学高等学校	大阪暁光高等学校	履正社高等学校	興國高等学校	東大阪大学敬愛高等学校	淀之水学院昇陽高等学校	早稲田攝陵中学校・高等学校
P・KIDSスクール	香ヶ丘リベルテ高等学校	四天王寺中学校・高等学校	清風南海中学校・高等学校	清風中学校・高等学校	相愛中学校・高等学校	